

旧約聖書を読んで感じること (120) 第二ゼカリヤの幻

「託宣」という言葉で始まる9章以下は、第二ゼカリヤによる予言とされています。表現が少し変わってきますが、第一ゼカリヤの幻に導かれるように、その冒頭に、新興の都が迎える王は平和の王であるという主張がなされています。娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。(ゼカ9:9)



アケメネス朝 エフド(ピンク色)

この言葉の中に、アケメネス朝ペルシャ帝国の最も小さい一州エフド(Yehud)、エルサレムを中心とした狭い地域でしか、イスラエル人として生きられなかった民の思いが夢、幻、あるいは冗談めかした形で表現されているようです。ナイルの深みはすべて干上がり/アッシリアの高ぶりは引き下ろされ/エジプトの王笏は失われる。(ゼカ 10:11)と黙示的に、イスラエルの再興を願う思いを語っていますが、ダビデ王家の血筋につながるゼルバベルはもはや、登場することはありません。

このゼカリヤの預言はイエス様が十字架の死を覚悟され、エルサレムへ入城された時に、それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「シオンの娘に告げよ、『見よ、お前の王がお前のところにおいてになる、／柔和な方で、ろばに乗り、／荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」(マタ 21:4)と引用されています。ゼカリヤの預言は神の御心であると、イエス様は信じ、ご自身の行動を通して表されたのです。

第二ゼカリヤは、捕囚の生き残りの者、イスラエルの民に、皆に帰れと呼びかけます。悪い羊飼いのもとで、羊のように彷徨ってきた民を、神は憐れみ、再び呼び集め、力を与えるとイメージ豊かに詩を歌います。捨てられていた民は、隅の石、杭、戦いの弓、指揮者、勇士となる、と励まします。民を導く指導者である羊飼いが持つべき杖の一本は「好意」であり、もう一本は「一致」であると言います。別の言葉で言えば、民を慈しむ「愛」であり、心をつにして進む「信仰」と言えるでしょう。

エルサレムに対するイメージも、「あらゆる民にとって重い石」、すなわち決して揺るがない存在であると語ります。そこを攻めるものは必ず滅ぼされる。そのために、民のすべきことも告げられます。それは偶像礼拝を捨てることです。これが当時は非常に厳しい要件であり、三分の二は死に絶え、残りのこの三分の一をわたしは火に入れ／銀を精錬するように精錬し／金を試すように試す。彼がわが名を呼べば、わたしは彼に答え／「彼こそわたしの民」と言い／彼は、「主こそわたしの神」と答えるであろう。(ゼカ 13:9)と信仰によって立つことだけを求めます。この人々をも残りの者と呼ぶのです。



ゼカリヤ、ハガイの墓(ケデロン谷)

ゼカリヤは「主の日」を待望しています。その日、エルサレムから命の水が湧き出で／半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい／夏も冬も流れ続ける。主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主は唯一の主となられ／その御名は唯一の御名となる。(ゼカ 14:8) その日とは神が裁きを行われる日、畏れおののく日ですが、ゼカリヤは、主を礼拝する日として希望をもって待ち望んでいます。けれども、同時に残りの者たちだけが、破滅が再び望むことはなく、エルサレムは安住の地となるその日を享受すると言います。

幻を見ながら、平和の王なる主がイスラエルを完全に回復してくれるという希望を心に思い描き、喜びながら、歌いながら、ゼカリヤは語り続けました。